

翻訳家・岸本佐知子を選ぶ

大人にこそわかる味わい深い本30冊

『日本のヤバい女の子』

はらだ 有彩著
柏書房 388ハ

乙姫、かぐや姫、清姫。昔話の女性キャラはなぜか化け物じみていたり言動が無茶だったりする。そんな彼女たちを現代に召還し、女子会でもするみたいに本当の気持ちを聞いてみた本。Me Too の時代に広く読まれるべき、新しい名著の誕生です。



『ヒア』

リチャード・マグワイア著
国書刊行会 726マ

ここ数年でもっとも「すごい！」と感動した本。定点観測のように視点を一つの場所に据え、ページをめくるとに30数億年のタイムスケールを自在に行き来する。そう、これは「時間」をモノとして体感する画期的なアートなのです。



『本当の話』

ソフィ・カル著
平凡社 740カ

見知らぬ男を理由なく尾行する、あるいは人に頼んで探偵に自分を尾行させる、その顛末を記録したドキュメンタリー。読むほどに、しだいに自分を取り巻く虚と実の境目まで曖昧になっていく、その不思議なスリル。



『眼ある花々』

開高 健著
中央公論新社 B914カ

花に事寄せてつづる、さまざまな土地の記憶。作者はまるで猛獣使いのように日本語を鮮やかに鍛え、踊らせ、しならせる。「君よ知るや、南の国」の南国の日没の描写は何度読み返したか知れません。



『友だちは無駄である』

佐野 洋子著
筑摩書房 B914サ

読んだ人にだけわかる、このタイトルの素晴らしい意味。大連で兄と二人、犬ころみみたいに転げ回って遊んだ記憶の切ない美しさ。



『遊覧日記』

武田 百合子著
筑摩書房 914タ

百合子さんは大人になっても赤子のような「眼」をもっていた。だから何も起こらない公園の風景を書いても最高に面白い。



『イリノイ遠景近景』

藤本 和子著
新潮社 914フ

神翻訳者・藤本和子のひそかな特技は「盗み聞き」。イリノイの田舎町の日常を描きながら、そこそこに顔を出すそのへんのおばちゃんたちの会話が無類に愉快。



『金曜日の本』

吉田 篤弘著
中央公論新社 914ヨ

子供時代の記憶をこんなふうに残しておけたら、と羨ましくなる一冊。町には特別美味しい水の出る蛇口が三つだけあって、うんと仲良くなった子にだけそれを教えた、とか。



『英国短篇小説の愉しみ3 輝く草地』

西崎 憲編
筑摩書房 933エ3

英米文学の目利き・西崎さん編集のアンソロジー。アンナ・カヴァンによる表題作は悪夢のような美しさといい翻訳の素晴らしさといい、まるで宝石のようです。



『犬物語』

ジャック・ロンドン著
スイッチパブリッシング 933ロ

『野性の呼び声』？ ああ子供のころ読んだよ、という人にこそぜひ読んでほしい。こんなに奥深い話だったか、ときっと驚くはず。



『誰もいないホテルで』

ナタリア・ギンズブルグ著
白水社 973キ

原稿執筆のために山奥のホテルを訪れると、そこには妙齢のフロント女性が一人きり、でも何かがひどくおかしい……。どの物語も人間の認識の曖昧さ、危うさを描いて、ひんやりと面白い。



『トーベ・ヤンソン短篇集 黒と白』

トーベ・ヤンソン著
筑摩書房 B949ヤ

モンティ・パイソンも色を失うナンセンスで不条理な笑い。だがハルムスはスターリン政権下のソ連でこれを書いたために、政権批判の罪で投獄され、命を落としました。まさに不条理。



『ぼくのともだち』

エマニュエル・ボーヴ著
白水社 953ホ

ニートで貧乏で友だちゼロ、でもなぜか自信満々のウザキャラが主人公。これが八十年前のフランスで書かれたとはにわかには信じられない、「今」の気分の小説です。



『ある家族の会話』

リチャード・マグワイア著
国書刊行会 726マ

あるイタリア人一家の歴史を、家族間で逸話のように語り継がれるさまざまな“セリフ”を軸に語り起こす。カミナリ親父の造形をはじめ、翻訳者・須賀敦子のユーモアのセンスが炸裂する、マイ・エバーグリーンな一冊です。



『ハルムスの世界』

ダニイル・ハルムス著
ヴィレッジブックス 983ハ

見知らぬ男を理由なく尾行する、あるいは人に頼んで探偵に自分を尾行させる、その顛末を記録したドキュメンタリー。読むほどに、しだいに自分を取り巻く虚と実の境目まで曖昧になっていく、その不思議なスリル。



翻訳家・岸本佐知子を選ぶ

大人にこそわかる味わい深い本30冊

『怪しい来客簿』

色川 武大著
文藝春秋社 BFイ

自由に突拍子もなくてうっすら怖い、日本のエッセイの金字塔。なぜか富士山を全力でディスる「門の前の青春」は何度読んでも笑ってしまう。



『世界の終わり、あるいは始まり』

歌野 晶午著
角川書店 Fウ

わが子が人を殺したかもしれない証拠を見つけてしまった父親の苦悩……からの、あつと驚きの語りのマジック。推理小説ファンには不評みたいですが、私は大好きな一冊です。



『真鶴』

川上 弘美著
文藝春秋社 Fカ

理由もなく消えてしまった夫の行方を追ううちに、死者と生者の領域のあいのような幽玄世界に迷いこんでいく。不気味で美しい、ふるえるような傑作



『みいら採り猟奇譚』

河野 多恵子著
新潮社 Fコ

お見合い結婚した若夫婦が、夜毎の性の調教に激しくのめりこんでいく。日々の慎ましく穏やかな暮らしの細やかな描写があるからこそ、この異様な結末がリアルに胸に迫ってきます。



『シナプスの入江』

清水 義範著
福武書店 Fシ

「ワタシ」とは無数の不確かな記憶の集積に過ぎず、いったん疑いだせばガラガラと崩れてしまうようなあやふやなものなのかもしれない。みんなの知っている抱腹絶倒パスティーシュ文学の清水さんの、シリアスな名作。



『十二神将変』

塚本 邦雄著
河出書房新社 BFツ

歌人・塚本邦雄が書いた推理小説のひそかな名作。見え隠れする『虚無への供物』へのオマージュ、したたるがごとき文章の色気。そしてまさかのやおい要素。



『家族写真』

辻原 登著
河出書房新社 BFツ

使われる言葉の一つひとつが完璧に計算された、恐るべき短編群。これを読んで以来、助詞「が」と「は」の違いにとっても意識的になりました。



『邪眼鳥』

筒井 康隆著
新潮社 BFツ

筒井康隆が断筆宣言ののち四年ぶりに放ったのは、記憶と時間の謎をめぐる、美しい傑作でした。行間に怪しく漂う、分析不能の澱のような成分に酔いしれます。



『D菩薩峠漫研夏合宿』

藤野 千夜著
新潮社 Fフ

センパイに恋する男子の、遠い夏の切ない思い出。「おにいさまへ……」「花ぶらんこゆれて……」等々、各章に懐かしの少女漫画のタイトルがついている。これでピンと来た人は迷わずGO。



『真実真正日記』

町田 康著
講談社 Fマ

ニセ日記形式の小説には面白いものが多い。日記には人間のいちばん濃い闇が表れるし、作家もののび好きなことができるから、でしょうか。



『エクリチュール元年』

三浦 俊彦著
青土社 Fミ

テレパシーによって、文学作品の書かれていない背景が明らかになる表題作。スタインバックのほぼ全作品において、登場人物には鼻の穴が三つあった！



『真夜中の自転車』

村田 喜代子著
文藝春秋社 Fム

近所の自転車屋さんの薄暗い天井に吊られた無数の自転車。あれに乗ってみたい……。村田さんの書くものは、何気ない日常にぬっと異様な何かがふいに顔をのぞかせる、その「ぬっ」の具合が本当に素晴らしいです。



『あのした時空大サーカス』

山田 正紀著
中央公論社 Fヤ

少年時代に出会った旅のサーカス団をめぐる記憶が、やがて時間をめぐる壮大なテーマに連なっていく。大人向け、をテーマに選んだ本を選ぶと、どうも時間と記憶、が必然的にもう一つのテーマになるようです。



『顔』

山本 昌代著
河出書房新社 Fヤ

八百屋のご隠居の首の後ろにはもう一つの「顔」があって、でも誰もそれに言及しないー。日常の背後にひそむ底知れぬ闇。一行一行、息を殺して読みました。



『箱の夫』

吉田 知子著
中央公論社 BFヨ

日常と異界がふつうに地続きになっている、そのうっすらとした怖さ。表題作は夫が一升瓶ほどの大きさ。でもそのことに何の説明もない。

